

プロローグ

元TBSのアナウンサーが、発達障害であると紹介するNHKの番組がありました。その人物をテレビで見ると、才能あふれる方という印象があります。生活上、多少のぎこちなさがあったとしても、障害という名をつけるのは相応しくないという感じがしました。それで、NHKが番組として取り上げたことの真意は何かと考えました。

はじめに思ったことは、「その元アナウンサーのような状態でも発達障害なのだから、発達障害といわれても気にすることは無い、社会でバリバリと活躍できますよ」というメッセージを人々に送ったのだろうか？ ということです。

次に思ったことは、「その元アナウンサーを発達障害と認定するならば、世界中の大多数が発達障害になるだろう」ということです。

さらに、重度な状態の、自閉症、LD・ADHDで苦しみ、特別なかわりが必要な人たちへの配慮がない番組だと感じました。

個性的な人、ユニークな人、ちょっと風変わりな人、集団からはみ出る人、人とは違う考え方をする人、天才的な人、他人と一斉の行動をしない人、等々に「発達障害」という用語を当てはめる風潮です。

優れた発想をするある人が、「発達障害」と呼ばれていたことをネットで知りました。呼ばれた人は、『革命のファンファーレ——現代のお金と広告』の著者でした。彼はユニークな人で、平均的な生き方をしていないことが、ツイッターなどを見るとよくわかります。

誰かが、この人をアスペルガーではないかと思っただけで、発達障害の子どもの育て方について、という質問をしていました。しかし、『革命のファンファーレ』の作者は、考え方や行動が平均的ではありませんが、コミュニケーション・スキルに優れた方で、自閉スペクトラム症のカテゴリに入る人ではありません。

重度な自閉症の状態から、社会で縦横無尽に活躍する個性的な人々の状態までを発達障害とする社会は、正常ではないと思います。

これから、「発達障害」という用語の使われ方について批判的に書いていきます。そして、「自閉スペクトラム症・LD・ADHD」の統括用語「発達障害」は必要ないという意見を伝えたいと思います。

I 発達障害という用語

- 1 障害と症 4
- 2 「発達障害」用語の曖昧さ 5
- 3 障害をつけて呼ぶことはない 7
- 4 個性を「発達障害」と捉える？ 8
- 5 教師には指導する責任がある 10
- 6 自閉症・LD・ADHDには適切な対応が必要 11
- 7 従来「発達障害」用語は「自閉症」を指していた 13
- 8 教育の問題 15
- 9 「発達障害」と言い切れない 17
- 10 「発達障害」という用語の始まりと終わり 18

II 用語「発達障害」の捉え方

- 1 学者が考える用語「発達障害」 24
- 2 日本以外ではどうか 26
- 3 日本では 34
- 4 DSM-IVの表記 37
- 5 DSM-5の表記 38
- 6 インクルーシブ教育 40
- 7 診断の難しさ 41

III 自閉症 (Autism)

- 1 自閉スペクトラム症 44
- 2 レット障害 47
- 3 小児期崩壊性障害 48
- 4 特定不能の広汎性発達障害 (非定形自閉症を含む) 48

IV

ADHD (Attention Deficit Hyperactivity Disorder)

- | | | |
|---|--------------------|----|
| 5 | 自閉性障害 | 49 |
| 6 | アスペルガー障害 | 50 |
| 7 | 学者が捉える自閉症の様相 | 51 |
| 8 | DSM-5に表現された自閉症の様相 | 55 |
| 9 | 自閉症の原因と様相 | 56 |
| 1 | ADHDの徴候 | 60 |
| 2 | ADHDの原因 | 62 |
| 3 | ADHDをどう見るか | 64 |
| 4 | 医師ホフマンの子ども | 67 |
| 5 | 医師クリットンが見つけた不注意タイプ | 69 |
| 6 | 神経過敏なADHD | 70 |
| 7 | ADHDの薬物療法 | 71 |
| 8 | ADHDの行動療法 | 73 |
| 9 | 愛情あるかわり | 75 |

10 マイケル・フェルプスのこと 78

V LD (*Learning Disability*)

- 1 ヨーロッパの医者が発見した学業上の不調 82
- 2 アメリカで生まれた用語 84
- 3 LDは器質的・永続的(発達上の障害ではない) 86
- 4 LDは総括的用語 87
- 5 ディスレクシア(言語性LD) 88
- 6 ディスレクシアの徴候 90
- 7 Disability(能力を欠く)ではなくDifference(学び方の違い) 92
- 8 ディスレクシアの人々 93
- 9 ディスレクシアの発音指導 96
- 10 自己概念で変化するLD状態 99
- 11 ディスグラフィア(書き文字のLD) 101
- 12 算数のLD(ディスカルキュリア) 102
- 13 筆算の手順につまづく子 104

VI

脳機能に働きかける

- 14 時計の読みに苦勞する子 106
- 15 算数LDのさまざまなこと 108
- 16 算数LDの研究 111
- 17 デイスレクシア（言語性LD）のことを本にした母親 114
- 18 少年マックが語るデイスレクシア 118
- 19 デイスレクシアであることを知らずに育つ 129
- 20 日本語圏におけるLD状態（言語性＋非言語性）の子 138
- 1 LDの脳機能不全を治療する 146
- 2 神経可塑性 147
- 3 リスニング・プログラム 148
- 4 重度なLDを治療する 150
- 5 ローゼンツウェイク博士の可塑性研究 151
- 6 ルリヤ博士の脳地図 153
- 7 兵士の脳の傷とルリヤ博士の研究 154

VII

教育の問題と用語に関する考察

- 8 重度なアロースミスさんのLD状態 156
- 9 補償型の教育 158
- 10 神経可塑性に働きかける 160
- 11 アロースミスさんの学校 161

- 1 アロースミス・スクールを卒業した人 166
- 2 普通学級で問題児だったエジソンとアインシュタイン 167
- 3 インクルーシブ教育の実践 169
- 4 絶対的なものではなく作られた用語 171
- 5 限局性学習症 173

エピソード 175

おわりに 184

参考文献 188

I

発達障害という用語

1 障害と症

DSMというアメリカの精神疾患の診断書の日本語訳は、二〇一三年までは「自閉症スペクトラム障害」だったけれど、最新版では「自閉スペクトラム症」という表記に変わっています。

「注意欠如・多動性障害」は、「注意欠如・多動症」、「学習障害」は「限局性学習症」と表記されています。

日本語に翻訳するとき、それらの状態は「障害」ではなく「症」で表せる状態だと、関係者が考えたのでしょうか。

「発達上の障害」と表現すれば、肢体不自由など、発達過程でのさまざまな状態が想起されますが、「発達障害」という四字熟語を聞くと、「発達障害」という一つの障害があると思ってしまう人が出てきます。

ですが、「発達障害」という障害はありません。

2 「発達障害」用語の曖昧さ

「発達障害」という言葉は、アメリカの診断書にある Developmental Disorder の日本語訳です。DSM という診断書内では、はじめ「知的障害」「自閉症」「LD」を Developmental Disorder (発達障害) としますが、後に ADHD も加えます。

しかし、改訂版の DSM (診断書) 内においては、診断のための分類の仕方が変わり、Developmental Disorder (発達障害) という言葉は消えています。

英語版で消えた Developmental Disorder の日本語訳「発達障害」という言葉が、内容を明確にせず、広まっています。

従来、肢体不自由、病虚弱、視聴覚障害、知的障害、ダウン氏症候群、自閉症等といった問題をもつ子どもたちは、特殊教育の学校や学級で教育を受けてきました。しかし、これらの状態に入りきれない子どもたちが注目されるようになって、二〇〇七年ごろから、その子たちを「発達障害」という用語で括るようになっていきます。

これを「自閉症・LD・ADHD」を括った言葉として使うならば、DSM-III（診断書）内で、この三つをDevelopmental Disorderと統括した英語の日本語訳としては理解し
ます。

しかし、自閉症・LD・ADHDは、三者の状態が異なり、それぞれに適切な対応をす
る必要があります。「発達障害」という名でひとまとめにして対応できるといったもので
はありません。

そして、そこに、個性的、ユニーク、風変わり等々の状態が、「発達障害」用語に包含
されて、その言葉が定着していることについては、理解の範疇を超えます。

「自閉症」でもない、「LD」でもない、「ADHD」でもない人たち、つまり、個性的
と呼ばれる人々を巻き込んで、「発達障害」用語が広まっている現状を見過ごすことはで
きません。

3 障害をつけて呼ぶことはない

あるとき、一人の男子学生が研究室にきました。授業の課題提出が遅れたことの言い訳なのか、最近母親に、「あなたは発達障害らしい」と言われたと、不安そうにするのです。母親の友人が、そうではないかと言っていたというだけで、確たる根拠があつてのことはなさそうでした。

原稿用紙に書かれたレポートを見ると、平均的でない具合の文字と文章だったので、「何の発達障害？」と聞くと、首を横にかしげて、「さあ？」と、浮かぬ顔をしていました。

私が、「読み書きに関するできなさなら、言語性LDという状態があるけれど。今度ゆっくりあなたのことを聞かせてね」と言って、その場は終わりました。

その後、発達障害という言葉も、言語性LDという言葉も使うことなく、彼の期末テストも平均的な成績で、春学期が終わりました。

教室でその学生の状態が問題になることはなく、LDでもADHDでもなく、自閉症でもない（それらの極微細な状態があるかもしれませんが）、彼を障害という言葉で形容する必要があるのかと、晴れやかな気持ちにはなれませんでした。

4 個性を「発達障害」と捉える？

二〇一七年のネットニュースです。毎日のようにテレビに出て司会者として活躍している人が、「自分は小さいころ発達障害だったので母親が劇団とかに入れたので、このようになってしまった」と語っていました。それに対して、M県の元知事が「発達障害というからいけないんじゃない。個性ということじゃない？」と、返したということが、話題になっていました。

二〇一八年の夏に開催された教育者の会で、発達障害という題の講演がありました。その発表で使われた、パワーポイントの最後のスクリーンの、左端上に「発達障害」、右端

下に「個性」と書かれていて、その講演をした専門家が、「発達障害」は「個性」だと
言っていました。

さらに、その専門家は、ある電子作家のことに触れ、その作家が自分自身のことを「選
択的発達」と呼び、一般の人を「平均的発達」と呼んでいることを紹介して、「障害」と
いう言葉よりは、この方がよいとも言っていました。

しかし、個性的、選択的では済まされない、支援が必要な重度な自閉症・LD・ADHD
の状態があることは明らかです。この三つに個性的な状態も含めて「発達障害」と呼び、
発達障害は個性だと言い切る講演者に、誰も反論していませんでした。

質問の時間はありませんということだったからでしょうか？

私は以前、別の教育者の会で、「発達障害」という言葉の使い方がおかしいのではない
かと質問したことがあります。そのとき、その会のトップの方が、もうすでにそうなっ
ているのだから、という答えで、議論の余地はないという風でした。

『広辞苑』を見ると、「個性」は「個人に具わり、他の人とは違う、その個人にしかない
性格・性質」とあり、「障害」は「さわり。さまざま。じゃま。身体器官になんらかのさ
わりがあつて機能をはたさないこと」とあります。

1 LDの脳機能不全を治療する

LDは器質として生まれながらに存在し、その状態は一生続き、治療(cure)するものではなく、どう対処(cope)するかが課題であると認識し、私は今までそのように書き、伝えてきました。

弱い面を補償し、強い面を生かすことがなすべき最善なことだといってきました。しかし二〇一六年に、その概念を覆す書物に出会いました。その書には、皮質下の機能不全な領域に働きかけて治すということが書かれていました。

ノーマン・ドイジ著『脳はいかに治癒をもたらすか』という題の書物です。

LDの対応に、Cure(治療)する方法があるということと、Cope(対処)あるのみということでは、LD教育は根本から変わります。LD状態は治るといつているのです。

この書の内容は、「LD状態はCureするものではなく、Copeする方法があるだけだと信じていた私」には、強烈に響きました。

神経可塑性に働きかけて機能不全を治療するというのです。

可塑とは、自由に物の形が作れるという意味で、刺激によって、新たな結合がニューロン間に形成され、機能不全が解消されるというものです。

2 神経可塑性

脳の神経細胞に向けた、何らかのエネルギーによる刺激が、脳の眠りこんだ神経回路を再生させるといいます。

光、音、電気、振動、動作、思考等が、神経への刺激に利用でき、それらが皮質下の脳システムに働きかけ、脳細胞の可塑性を可能にするといいます。

ノーマン・ドイジ氏は、パリ大学、医学部耳鼻咽喉科を卒業の医師、アルフレッド・トマティス博士の理論を紹介しています。

聴覚に働きかけて、音による刺激で神経可塑性を促すという方法です。

トマティス博士は、聴覚、心理学、音声学を専門として研究を続けます。そして、耳は脳のバッテリーだとして、電子耳を使って音を送り、音の刺激で皮質下に変化をもたらすという研究をします。

前頭皮質は、脳の最も外側に位置し、脳の高次機能を担う領域です。

ここでは、推論、計画、行動の抑制、集中、抽象思考、意思決定、他者の思考や感情等を把握します。音の聴覚への刺激により、皮質下の構造が大規模な成長を遂げて、その変化に呼応して、神経細胞が再配線されるように導くことで、LD状態の恒久的改善がもたらされるといいます。つまり治療可能ということになります。

3 リスニング・プログラム

トマティス博士の探求は、さまざまな言語、学習、重度なLDの治療へと向かっていきます。そして、トマティス・リスニング・プログラムという方法を創始します。これは、

受動フェーズと能動フェーズの二段階からなります（ここでは内容は省きます）。

そのころ、ポール・マドールという青年がトマティス博士の治療を受けます。ポール・マドールは一九四九年生まれで、重度なLD状態がありました。

聴覚は正常でしたが、聞き取りが悪く、学校は四度も落第します。学校をあきらめ、一八歳のとき、社会から孤立し、修道院に通い続け、そこでトマティス博士に会うのです。

博士は、無気力になった修道僧たち（なぜ無気力になっていたかもここでは省きます）を治療するために来ていたのです。そこで出会った、重度なLD状態のポール・マドールの治療をしました。

二段階のリスニング・プログラムを実施します。

結果、重度のLD状態が解消され、ポール自身が、トマティス・ウエイの後継者的存在になり、LDや自閉症の子らを治療していくことになります。

つまり、電子耳を使って、皮質下に音の刺激を与えて、機能の回復を図るといふ治療法を実践していくのです。

この皮質下の刺激で、LD状態の治療が可能ならば、日本はもちろん、世界中のLDの子どもたちに、この方法を使うべきです。すでに、フランス、アメリカ、カナダ、南アフ

リカ等の国で、電子耳を使ったトマティス・ウエイが実行されているそうです。

さらに、LDの神経可塑性による治療について知りたいと思い、ノーマン・ドイジ氏の著書『脳は奇跡を起こす』というLDについて書かれた本を探しましたが、絶版になっているのか、手に入りませんでした。後に図書館で見つけましたが。

その後、神経可塑的な方法で、重度なLD状態を治療したアロースミスさんという方のことを知りました。

4 重度なLDを治療する

独自の方法で、LD状態を治療した自身の体験を、講演しているアロースミスさんの映像をネットで見ました。

来る日も来る日も、長針と短針の時計の読みをしていくという壮絶な訓練を行い、重度なLDを治療したのです。

参考文献

- 氏家靖浩「発達障害概念を講義する側の品格」松本雅彦、高岡健編『発達障害という記号（メンタルヘルス・ライブラリー21）』批評社、二〇〇八年、一三〇～一四四頁
- 河合俊雄『発達障害者への心理療法的アプローチ』創元社、二〇一〇年
- 熊谷高幸『自閉症からのメッセージ』講談社現代新書、一九九九年
- 榊原洋一『多動性障害児』講談社α新書、二〇〇一年
- ジマーマン、バリー・J.、デイル・H. シャンク編集（塚野州一訳）『教育心理学者たちの世紀——ジュームズ、ヴィゴツキー、ブルナー、バンデューラら16人の偉大な業績とその影響』福村出版、二〇一八年
- 菅井準一『アインシュタイン——原子力の父（世界偉人伝全集48）』偕成社、一九六六年
- 高岡健「発達障害学説小史」松本雅彦、高岡健編『発達障害という記号（メンタルヘルス・ライブラリー21）』批評社、二〇〇八年、一五五～一六〇頁

滝川一廣「発達障害をどう捉えるか」松本雅彦、高岡健編『発達障害という記号（メンタルヘルス・ライブラリー21）』批評社、二〇〇八年、四四～五五頁

玉井収介『自閉症』講談社現代新書、一九六八年

玉永公子『特別教育いま、マレーシアは——インクルーシブ教育をめざす世界の障害児教育』ラピュータ、二〇一六年

玉永公子『ディスレクシアの素顔』論創社、二〇〇五年

玉永公子『LDラベルを貼らないで』論創社、二〇〇〇年

ドイジ、ノーマン（高橋洋訳）『脳はいかに治療をもたらすか』紀伊國屋書店、二〇一六年

ドイジ、ノーマン（竹迫仁子訳）『脳は奇跡を起こす』講談社インターナショナル、二〇〇八年

中山光義（岩井泰三・絵）『エジソン——世界の発明王（世界偉人伝全集12）』偕成社、一九六〇年

米国精神医学会（高橋三郎、大野裕監訳）『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引』医学書院、二〇一四年

米国精神医学会（高橋三郎、大野裕、染矢俊幸訳）『DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引』医学書院、二〇〇三年

村瀬学、田中究、松本雅彦、高岡健編「座談会 発達障害概念の再検討」松本雅彦、高岡健編『発達障害という記号（メンタルヘルス・ライブラリー21）』批評社、一二～四三頁

発達障害という記号（メンタルヘルス・ライブラリー21）』批評社、一二～四三頁

❖著者略歴❖

玉永公子（たまなが・きみこ）

国立大分大学卒業、南カリフォルニア大学大学院修了。
修士号（特殊教育）取得、博士号（教育心理学）取得。国
際ディスレクシア協会会員、日本教育心理学会会員。現
在、東日本国際大学特任教授。

著書として、『特別教育 いま、マレーシアは——インク
ルーシブ教育をめざす世界の障害児教育』（ラピュータ、
2016年）、『「発達障害」の謎』（論創社、2013年）、『アィス
レクシアの素顔』（論創社、2005年）、『LDラベルを貼らな
いで！』（論創社、2000年）。

用語「発達障害」批判

2019年10月14日 初版第一刷印刷

2018年10月24日 初版第一刷発行

著 者 玉永公子

発 行 者 森下紀夫

発 行 所 論 創 社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

編集・組版・装幀 永井佳乃

印 刷 ・ 製 本 中央精版印刷

©Tamanaga Kimiko 2019 Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1865-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。